

ロボット演劇・アンドロイド演劇

(大阪大学・ATR知能ロボティクス研究所)



撮影:南部辰雄

アンドロイド演劇:「さようなら」

ロボットが社会に自然に溶け込むには、人々にロボットが心を持っているように思わせる必要があると考えられます。本研究では、世界的に評価の高い演出・脚本家である平田オリザ教授の演出のもと、ロボットを人間とともに役者として登場させる「ロボット演劇・アンドロイド演劇」の構成に取り組みます。これにより、心を感じさせるロボットの実現、人間が心を感じるしくみの理解、また一般の人々のロボットに対するイメージへのリアリティの付与を目指します。



ロボット演劇:「働く私」



ロボット演劇:「森の奥」

シナリオベースのロボット開発

心を感じさせるロボットを作成するには、社会の中でのロボットの適切な振る舞い(表現)を知る必要があります。しかし日常場面は自由度が高く、そもそもロボットのどのような表現に、人間が心を感じとるのかが不明であるため、技術者単独による実装には限界がありました。これに対しロボット演劇では、シナリオが事前に限定されることで、演出家の直感をロボットの表現のヒントにすることが可能です。演劇用のロボット操作インターフェースを開発し、実現された演劇における演出内容の解析を通じて、インターフェースの改善、ロボットの半自律化の検討に取り組んでいます。



人間以上の人間らしさ

人間に酷似した外観をもつアンドロイドを利用することで、ヒューマノイド型のロボットとはまた違う演劇を作成することができます。アンドロイド演劇では、外見・ことば・立ち居振る舞いなどの人の魅力に関わる各要素を、あらかじめ可能な限り洗練させておき、それらをつなぎ合わせることで、人間は、そのように分解して洗練され、つなぎ合わされたものに、そうではない普通の人以上の魅力を感じるのか。公演に対する評価の分析を通じて、人間にとっての魅力、あるいは人間らしさ、といったものに迫ります。